

フィリピン大学マニラ校と 5th Eco-Bio Forum “Disaster-related Infectious Disease” を開催しました(2015/10/29)

テーマ：災害感染症としてのレプトスピロシス、結核、マラリア研究
場 所：星陵キャンパス

2015年10月29日、当研究所の災害医学研究部門 災害感染症学分野がフィリピン大学マニラ校・公衆衛生学院の Groriani 教授および静岡県立大学名誉教授柳原保武教授をお招きし、星陵会館で第5回 Eco-Bio Forum “Disaster-related Infectious Disease” を主催し、浩日勒助教が参加しました。まず当分野の研究生が結核とマラリアの研究発表を行い、それぞれの災害との関りについても触れました。その後、医工学研究所の川瀬三男教授がゲストスピーカーとして「Introduction of Rapid Genetic Testing Method “STH-PAS”」を紹介され、多数の病原体を同時に簡易に検出できる方法の開発が順調に行われていることを紹介されました。

続いて Groriani 教授が「Managing Challenges to Leptospirosis Control (Countermeasures for Leptospirosis)」と題して特別講演を行い、レプトスピロシスについて、特に気象データとの解析を紹介され、雨量が多いこと、気温が高いこと、しかし28度以下が最も患者の発生が多いことなどを紹介されました。今後レプトスピロシスの発生を予想できるシステムを構築され、患者の迅速な診断につなげたいとの計画を示されました。また柳原教授は「The Leptospirology: Classic and New Aspects in Ecology of Leptospira」と題した講演で、レプトスピロシス研究の歴史的な背景を丁寧に説明されました。また長年レプトスピラ菌の培養を継続している実績に基づき、様々な土壌からレプトスピラ菌の単離に成功されましたが、現在までのところ、病原因子を有したレプトスピラ菌は土壌からは単離できていないとされました。また最近インドネシアでは火山の噴火により動物の移動が生じ、人獣共通感染症としてのレプトスピロシス患者の増加が見られたことも紹介されました。

これらより、雨量と気温に加え、土壌の変化、野生動物の移動など様々な因子がレプトスピロシス発生に関係することを明らかにすることができ、その発生予測や POC 診断法を充実させることが、レプトスピロシスなどの災害感染症に対する有効な対策となることを明らかにしました。



講演中の Groriani 教授



Groriani 教授、柳原名誉教授及び川瀬教授らと